

Title	パレスチナ巡遊記(上)
Sub Title	
Author	占部, 百太郎(Urabe, Hyakutaro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.3 (1930. 9) ,p.83(439)- 94(450)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300900-0083">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300900-0083</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# パレスチナ巡遊記 (上)

## タイベリアスとカバアナウム

吾等の自動車は前庭に薄荷樹ペッパーツリー茂るホテル・タイベリアスの玄關で駐つた。七時晚餐。九時入浴後就床。暑いので熟眠を得なかつた。

九月二十二日。六時起床。今日も朝から九十度近くの暑さだ。金を兩替すべく、ホテル附近の銀行に行く。ホテルの前庭から、市の要所々々にかけて、イギリスの兵士が嚴重に警戒してゐる。果然前日の暴動の餘燼ほこほりがまだ冷めないのだ！ 朝食の食堂にも、男客の大部分はイギリスの將校とそ  
の下士連であつた。多少の不安を感じない譯にゆかなかつた。

九時 Copernicum の古蹟を訪ふ可く宿を出た。吾等の自動車は湖面から吹き送る朝風を切つて驀

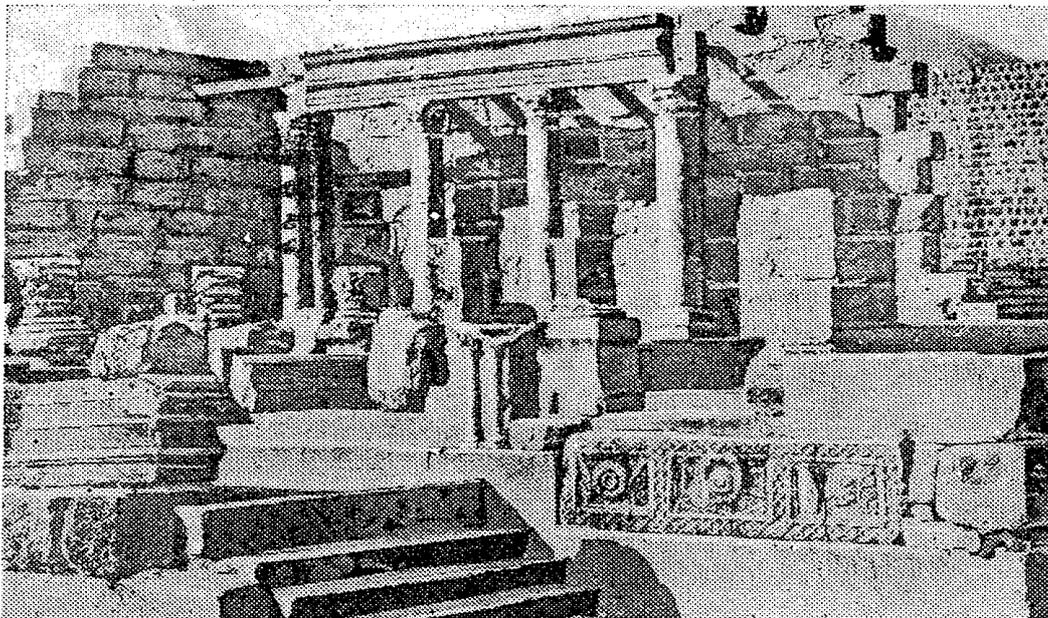
進する。沿道には仙人掌 *Ukalispos* (柳に似た木) などが茂つてゐる。彼處の畑、此處の草野には牛や黒羊の群れが彷徨してゐる。黒い鉢巻したアラビヤ人が凄いで、吾等一行を珍しげに睥ひる。裸の小馬に乗つた小兒のあとから、一層小さな生れて十日とたたぬ小馬がよちよちとついて行く。人間でも、獸類でも、子供は可愛いものだ。自動車が湖に沿ふて右に曲つた邊り、左の窓から *Mount Beatitude* が見ゆる。この山上で、タビデが『免された靈魂の祝福』を宣言し、キリストも『天の王國』に入ることを出来る人間の資質について、屢々説教したと傳へられてゐる。約三十分でカバアナウムに着いた。

カバアナウムはキリストがナザレから追はれた後、その宣傳の大本營に宛てた邑だが、舊約には

見はれてゐない。結局、カバアナウム人も、キリ

吾等が門をくぐつて、境内に這入ると、そこに、

ストが、『そして汝カバアナウムも……地獄に擠さるるであらう』と豫言したので、彼から叛き去つた。カバアナウムの Tell Hum と云ふ所に、猶太教の會堂シナゴグの發掘せられた遺趾がある。一八八六年最初にこの遺趾を發掘したサー・シー・ウィルソンは、マタイ傳中に記載せられてゐる猶太人の百人長センチュリオンの建立にかかると主張したので、他の考古學者等は紀元二三世紀頃建てられたのだと説いてゐる。フランシスコ派の修道僧たるドイツ人がウィルソンのあとを承けて、十數年間刻苦經營して發掘を續けたが、世界大戦によつてその事業は中止せられ、修道僧も死去したと言ふことである。



第一圖 カバアナウムの古跡發掘

金雀花エニシダの大樹が、蔚蒼として、冷しい葉蔭を與へる。休まうにも腰掛がないので、已むを得ず、直ちに灼くが如き日光を浴びて會堂を一巡した。既に發掘せられた部分だけでも、キリスト時代の猶太人の會堂の光景があり

と偲ばれる。會衆の怒聲罵聲にも滅げず、諄々と天國の近づきつつあることを説いた若いキリストの面影が僕の面前に彷彿して來る。柱頭キャピタルの花飾や、柱礎その他建築の破片に残つてゐる彫刻は見ごとである。床石のモザイク模様も美しい。婦人の座席なども發掘せられた。吾等は少時それに腰かけて、疲れた

足を休める。キリスト時代のカバアナウムは、ガリラヤ海邊の主要都市として、その會堂も、恐ら

く猶太きつての立派な建築であつたことが想像せられる。發掘の跡を見終ると、修道士は吾等を紀

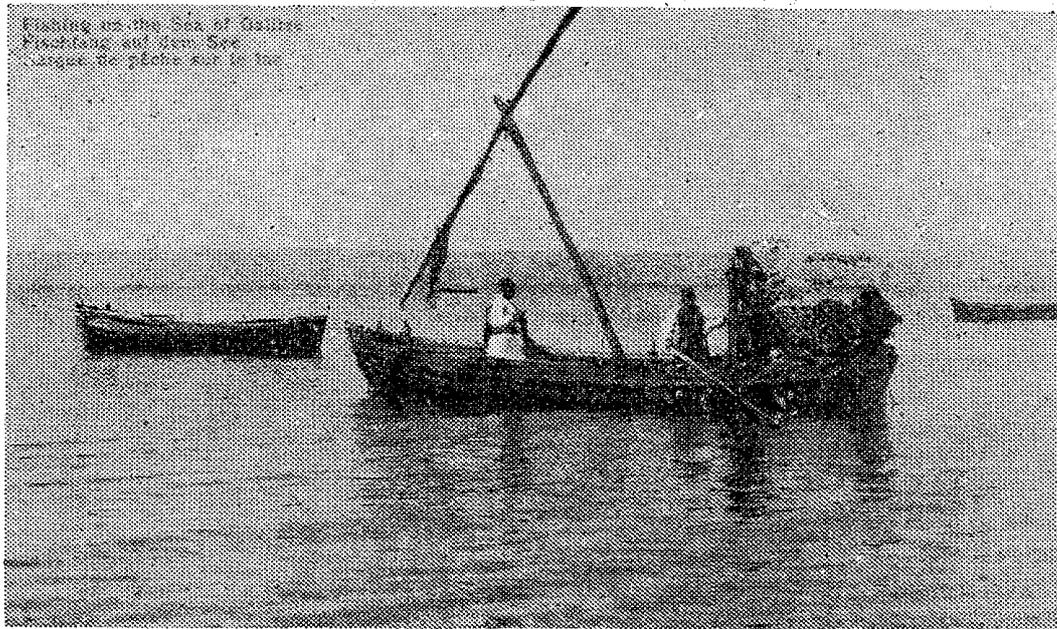
すすめたけれど、どうもその氣になれなかつた。何れにしても、カパアナウムから眺めたガリレー

念館の一室に案内した。茲には、キリストの受難、その他キリストに關した宗教畫や、靈寶と思はるる遺物が多少陳列せられてゐる。それから、

海の景色は、近東第一だと云ふことは、否まれない。十一時過タイベリアスのホテルに歸り著いた。

その紀念館の裏門を抜けると、直にタイベリアス湖の水際に出づる。このシリアとパレスチナの山々に圍まれた湖は、我が琵琶湖に比べて、遙に小さいが、清澄な淡水である。その水面は地中海面に比べても、尙且六百五十呎も低いので、タイベリアス地方は華氏百五十度にも上ることがあるさうな。鬚髯の立派な媽々した院主は、榎(?)の太木の葉蔭に休憩してゐた僕に向つて、連りに泳げと

だ。パレスチナがイギリスの委任統治に歸してか



第二圖 ガリレー海の漁夫

一時午餐。昨夕と同じく、湖で捕れた『聖彼得』と云ふ尊號ある一寸黒鯛に似た魚のフライが出た。マルセイユを解纜してから、各地ホテルの献立は相も變らぬのみか、その調理方も亦殆ど異手同工で、飽きくしてゐた際だつたから、このフライは大に僕の食慾をそそつた。少時午睡の後、四時半小舟をタイベリアス湖に泛べた。船頭は骨格逞ましい赤ら顔の猶太人。十歳ばかりなるその子が舵子の役

ら漁夫までが、多少英語を解するので、吾等にとつて便利であつた。船を湖の中心に漕がんとすると、屏風を連ねたやうなシリアの山側に黒雲が湧き出でて、驟雨が襲つて來さうな空合になつたので、猝かに船を濱邊に還した。其處から大道を隔てた丘陵の傾斜面に、點々赤屋根のバラックが見ゆる。猶太人の新部落である。ザイオニスト運動の結果、世界の各地から、故郷のバレスチナに歸來して他人種から迫害侮辱を受けない新天地を開拓しやうと云ふのだ。(この事に就ては後に述ぶる)。吾等はドラゴマンが携へて、來たビールに興を添へて、少時船頭と語つた。バレスチナの猶太人は、概して人が好く、歐洲各地に於ける夫れのやうに、惡ずれがしてゐない。僕は海邊に育つたせい、漁夫が好きだ。ペテロも、その弟のアンデレも、漁夫であつた。魚を漁るよりも人を漁れど、兄弟に教へたキリストも、或は漁夫ではなかつたかなごと想像を逞うする。五時半ホテルに歸つた。今夜も暑い上に蠅があるので弱らされた。

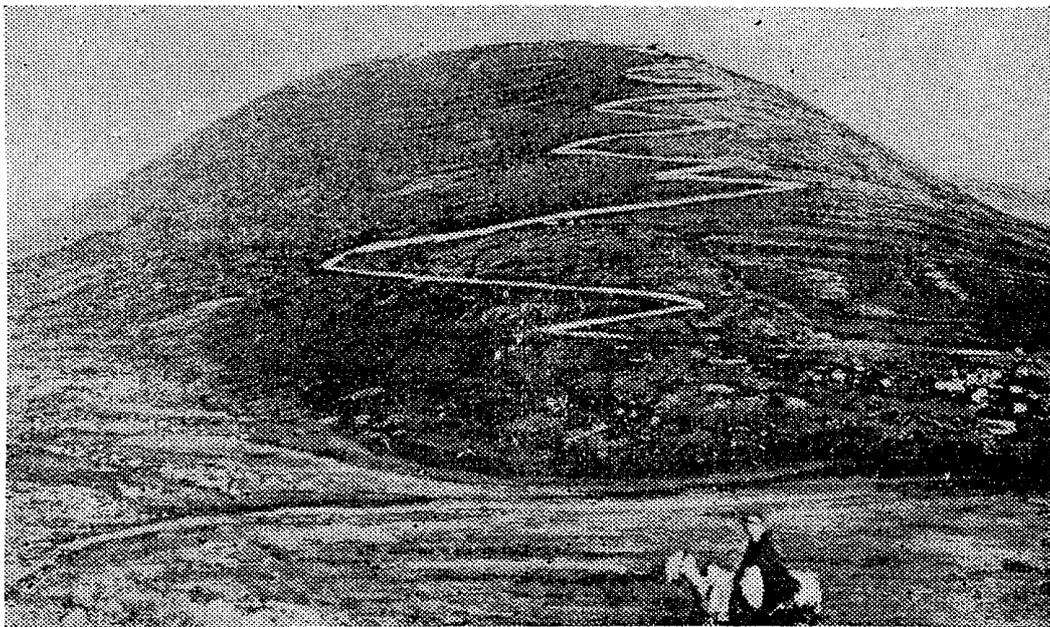
## カ ナ

九月二十三日。六時半起床。八時四十分ホテルを辭し、自動車をハイフアに向つて駛らせる。右にタイベリアス湖を眺めて、山腹の道路をうねりくへ上る。夏來たら定めて見事であらうと思はるる女郎花、薊、撫子に似た花、晝貌に似た花、紫や、白や、黄や、深紅なのや、淡紅なのや、色とりどりの草花が、強い日光に萎びて、元氣なく秋の名残りを止めてゐる。黑白の羊の群れは、高原のそこそこに枯草を食ふてゐる。アラビヤ人が駱駝に荷を負はせて、悠々と窪い坂道を通る。頓て左方に摺鉢を伏せた形の山を認めた。新約でお馴染の Mount Tabor<sup>ライムストーン</sup>である。全面石灰石の岩で、樹木は生えてゐない。頂上に二三點在する會堂に向つて、山道が蜒々として、長蛇のやうにうねつてゐる。この山頂で、キリストが屢々説教したことは、新約に顯著な話である。十時頃 Cana of Galilee に著いた。

四世紀の傳説によると、カナはキリストが最初の奇蹟を示した Kefr Kenna だと云ふことだ。(或

は Kana-el-Jaili だとの説もある) 此處にラテン禮拜堂があるが、それは十字軍の時に建てられた教會の地位の跡だと言はれてゐる。(その前にも、

コンスタンチン大帝の命を受けて、タイベリアス伯ヨセフの建てた教會があつたと傳へらる)。この禮拜堂の地下窖で、キリストが瓶子の水を葡萄酒に化したことは、ヨハネ傳に見へてゐる。吾等は玉なす汗を拭き、堂に入つて、聖書や、三四世紀の希來のモザイク彫刻を觀た。外に出ると、貧しい猶太婦人や、子供が繪葉書や小畫像やレース製蠅よけなどを押賣りする。繪葉書と蠅よけを記念



第三圖 タボル山

に少し買つて、匆々自動車に乗ると、男の賣子は自動車に飛び乗つて、うるさく買へくと勸むるので、弱らされたが、辛うじて車掌がそれを追ひ拂つた。この

邑には仙人掌が非常に多いが、砂埃にまみれたその景色は僕は嫌ひだ。

## ナザレ

十時半ナザレに着いた。

ナザレは聖母マリアが、大工であつた夫ヨセフと共に茲で産れたと云ふので名高い。レナンはキリストも此地で生れたのだと主張してゐるけれど、その説には大分反對が多くて、矢張りベスレヘムで産れたと云ふ最近權威者の説の方が正しいやうで

よつて著名になつた處だと云ふことは、舊約に一行の記事もないことでも察せらるる。人口約七千五百の一小市で、住民の多數は、農耕と牧畜と園藝とを生業としてゐる。下部ガリレアの丘陵に圍まれた盆地に建つた町で、一見清冷な處のやうだけれど、それでゐて、なか／＼に暑くて、且不潔だ。キリストが青年時代に此地で説教したことは新約に名高いが、爾後巡禮の集合地としての外、何等文献に見はれてゐない。十字軍時代に僧正管區とせられたが、トルコが取つて代つて此地に總督府を建ててゐた。現今イギリスの委任統治の下に在ること言ふまでもない。ナザレは美人の産地である。殊にお祭のとき縫箔したジャケットを被て金銀の貨幣を胸や前額に著けたナザレ美人の評判は、世界に名高いが、吾等は折あしく滿艦飾のナザレ美人を見るの光榮を有しなかつた。

自動車から下りると、其處が有名な『マリアの井』だ。婦人や子供が大勢水を汲んでゐる。僕もこの靈泉で渴きを醫さうとすると、カーキ服のイギリス兵士が、丁寧の水をすくつて呉れた。一體バ

レスチナ一圓(エチプトもさうだ)水に乏しいので、古來偉らい國王や有爲の政治家は、到る處大仕掛な井を穿つて、各自の記念事業に遺してゐたのだが、其等の多くは埋没して、この『マリアの井』は、辛うじて現存する其中の一つである。『聖リニアミリー家』がこの井で生活したと云ふことは、必ずしも信ぜられぬ妄説でもないやうだ。次に教會に詣でたが、今は何の印象も残つてゐない。此處のバザーは窖中でないが、目ぼしい商品とてなく、ブッチャーの店頭に鉤るされた牛豚の丸肉には、蠅がたかつてゐて、一見胸がわるくなる。不潔で且狹隘な石のころ／＼する街路には、アラビヤ人が多くて、猶太人は割合に少ない。大道に沿ふたドイツ人の經營するホテルで休憩した。

自動車に歸つて、再びハイフィに向ふ。山腹を切り開いた大道は依然として、うねりくねつてゐるが、ナザレからは、だん／＼と下り坂である。方々が路普請のため自動車を徐行させねばならぬので、速力の割に進行が遅い。百度以上の烈日の下に、土人の男女が大勢寄つて、男は石を割り、女は

割栗石を運ぶのである。斯くしてガリレ－高原の最後の峻坂を登りつめると、紺碧のグラスで壘んだやうな地中海が、一週間目で眼前に展開して来る。卒然として、天地が廣濶になつて来る。いよ／＼ハイファの町にかゝらうとする頃、左側に猶太人の新居留地、數百軒の例の赤屋根が櫛比して建つのを見受くる。右側のロスタチャイルド家經營のセメント工場からは、煙が熾んにあがつてゐる。新來の猶太人も、多數此工場に使はれてゐることであらう。可なり長いハイファの町を通り抜けて、正午海岸のグラインド・ホテルに着いた。

### ハイファとカーメル山

Haifa はパレスチナの最北部に位する人口約二 〇〇〇 〇〇〇 がある。

パレスチナ巡遊記(占部)

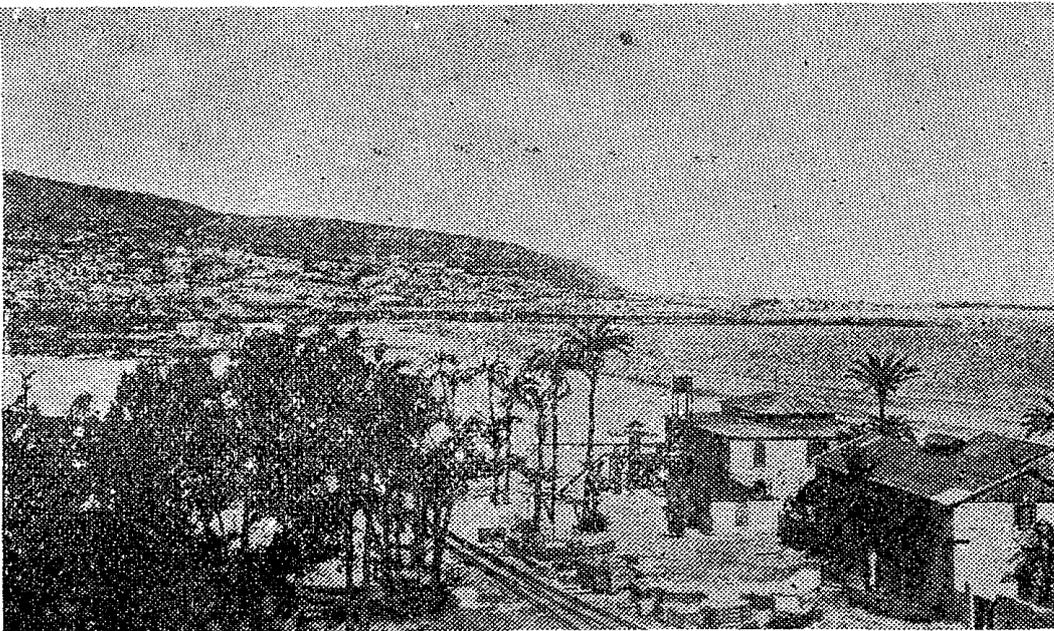


第四圖 チザレの『マリアの井』

萬五千の近代的要港である。北方は、太古フェネキヤ人が大に活動したシドン、タイル、アアクルの諸港と相連つてゐるけれど、聖書にはハイファに就て何等記するところがない。パレスチナ鐵道は此處を起點としてゐる。農務省の在る所から察しても、農産物がハイファの重要輸出品たることが知られる。一八九六年カイザーが近東を訪問したとき、ハイファから上陸したのだが、此地が近東の樞區たることに著眼して、いろ／＼施設するところがあつた。現にドイツ人の廣大な居留地が海岸に存在し、『ジャーマン・ピア』と呼ぶ波止場もある位だ。今は世界大戰の結果、イギリスが占領して、イギリス兵が、市内を嚴重に警戒しつつ

海に向つたホテルの僕の部屋には、冷しい地中海の風がそよ／＼と吹き込んで、半日の勞を慰めることが出来た。少憩して、三時半自動車 Mount Carmel に驅つた。

カールメル山は豫言者エリヤの奇蹟を以て著名である。ハイファが今日世界の觀光客を呼ぶのは、畢竟この靈蹟あるがためである。少し餘談にわたるが、舊約の『列王記』<sup>キングス</sup>にかう云ふ物語がある。イスラエルの國王アハブは、シドン國の娘ゼゼベルを娶つた。菩薩の面を被つた夜叉のやうなこの女王は、夫アハブを籠絡して、己が故國 Baal 神の信仰をイスラエル人に強制し、剩へ多くの豫言者を虐殺した。エホバ神は即ちイスラエル人の偶像崇



第五圖 ハイファの概景

拜を罰すべく、三年間の飢饉を下した。國人が何程バール神に祈つても、なかく雨は降らなかつた。『是においてアハブ、イスラエルの都ての子孫の中に人を遣り豫言者をカールメル山に集めたり時にエリヤ總の民に近づきて言けるは汝等何時まで二の物の間にまよふやエホバ若し神ならば之に従へされどバアル若し神ならば之に従へ』と。四百人のバアル神の豫言者が、祭壇の上に鮮血淋漓たる犢を乗せ、天に向つてがや／＼と合唱しても、さらにその效驗がなかつた。そこでエリヤも、均しく祭壇に犢の犠牲をのせて聲高くエホバの名を唱へた。『時にエホバの火降りて燔祭と薪と

石と塵とを焚つくせり亦溝の水を飮涸せり民皆見て伏ていひけるはエホバは神なりエホバは神なり

り』と。エホバの靈は即ち祭壇に供せられた犠牲の犠牲を舐めつくし、此くしてイスラエルの飢饉は救濟された。このあらたかなる靈驗を見て、イスラエル人は彼等の偶像を捨てて、眞神エホバに復歸したと云ふのである。

カーメル山は東地中海に突起した石灰石の分水嶺で、ハイファから南東方十二哩に亘つてゐる。昔からその近傍に大都會がなかつたので、攻むるにも、守るにも、軍事上何等要害の地位を占めなかつた。往昔イスラエル十二部族の中四部落の住處として名高いが、要するにカーメル山は古來常に中立地として取り扱はれた靈場に外ならないのである。

Carmel 神の名に因んで、この山の名が起つたことは勿論である。山に天然の洞窟が幾つかあるので、古來屢々隱遁所に充てられ、有名なるギリシヤの哲學者ピタゴラスも、その洞窟の一つに隠れてゐたと云はれてゐる。前記のエリヤの記念の爲めに建てられた修道院は、彼がさる寡婦の哀願を納れて、その兒を死から蘇らせた洞窟の場處に、六世

紀ごろ建てられたのであつた。その後多少の變遷を経て、現今の修道院は一八二八年に建てられたものである。

ハイファの町はづれから、山頂まで約二哩、高さ四百九十五呎。吾等の自動車は、世界大戰で戦死した兵士の墓の蔭り立つ廣大な墓地を左右に見て十數分で忽ち山腹なるエリヤの修道院に達した。修道院は堅牢な要塞然たる岩上に建つ、かなり大きい建物だが、殊に敵襲に備ふるためか、壁は非常に厚く出來てゐる。この古刹がキリスト教史に見ゆる『カーメル教團』(Carmelites)の大本山である。併し現在修道僧は二十人ばかりしか居ない。修道院の第一階は巡禮を泊める數多の室を備へ、第二階は修道士モンクの寄宿舎に充てられてゐる。教會は修道院の中庭の眞中に立てられ、建築は第十八世紀式イタリヤ風で、圓塔が高く天に沖してゐる。教會の聖壇の下に、洞窟がある。エリヤがアハブの逆鱗に觸れ、身を以て、遁れた岩屋だと云ふことだ。吾等は例の如く、修道僧の案内で、手に蠟燭を携へて、洞窟に下りて行つた。な

る程エリヤが或はゼゼベルを面責し、或は日蓮も  
ごきは何百と云ふバアル教の衆僧と問答した降魔  
の利劍のやうな名句は、こんな幽居でなければ、  
考へられぬやうなづかれた。あまり聖書を讀んで  
ないナイト夫人は、變な質問を連發して、ドラゴ  
マンや夫君を困まらせた。教會の裏側の壁は立派  
な陶器製の薄板<sup>セラミクス</sup>で張つてある。廣庭の中央には、  
巨大な臺石の上に、マリアの像を戴いた數條の花  
岡石の支柱が立つてゐる。

吾等は廣庭から左に曲つて、松や仙人掌の夥し  
く茂つた畑に出た。其處から、坂を下ると、サン  
シモン・ストックを記念する禮拜堂があると云ふこ  
とだけれど、暑さと埃とに避易して、踵を回して、  
廣庭の南端なる長老の會館に入つた。この會館は  
アズダラ・バシヤがアアクルに建てた修道院の遺  
物を寄せ集めて、此處に建て直したものださうな。  
温顔長髯の長老が媽こやかに、階上に案内して呉  
れた。東地中海の嶋嶼が手に取るやうに見晴らさ  
るる。アアクルの港は眼下に展開される。アアク  
ルに關しては、一つの美談がある。アプキイルの

海戦で大敗した大ナポレオンは、頽勢を挽回すべ  
く、トルコ征伐を企てた。難なくスエズを渡つて、  
パレスチナに攻入つたが、アアクルでは、トルコ  
軍の大將が、英國水師提督サー・シドニイ・スミス  
と海陸相應じて、頑強に抵抗したのみならず、フ  
ランス軍の中には悪疫が流行したので、流石の軍  
神も師を斑へすの外なかつた。ところが、一日イ  
ギリス海軍から、ナポレオンの許に、大きな包が  
届けられた。封裝をほごいで見ると、中からフラ  
ンス新聞紙の大束が出て來た。ナポレオンが其等  
の新聞紙を閲讀すると、彼が英海軍のためエチブ  
トに包圍せられて居る不在中、本國では、政變が  
續發して、執政官政府が王黨の爲に脅威せられて  
その地位の甚だ危殆なることが戴せてあつた。こ  
の報導を獲て、ナポレオンは革命政府を倒して、  
フランスの政權を掌握するには、この好機逸す可  
らずと即斷した。而して彼は痛くサー・シドニイの  
義俠を感銘した。この長老館は即今トルコ人の立  
てた燈臺のベースとして役立つてゐる。

夫れから山を下り、ドイツ人の居留地を通つて、

イギリス波止場に車を駐めた。まだ九月の末だから、海水浴場はなかく賑かだ。イギリス、フランス、ドイツ、イタリヤ、ギリシヤ等の西歐人もかなり、多いが、相變らずアラビヤ人が多數を占めてゐる。猶太人は此處でもあまり多くないやうだ。吾等は波止場を歩んで、海面に突き出た巨岩の上に跳び渡り、その上に蹲踞して少時涼を納れた。水晶のやうな海水を透して、魚群の悠々と泳いでゐるのが見える。その美觀は連も水族館の比ではない。土人の子供が魚を釣つてゐるけれど、大きな魚屬はかゝらないやうであつた。五時ホテルに歸つた。

## ナブルス

九月二十四日。九時自動車で、ジェルサレムに向つてハイファ<sup>ア</sup>出發。十時頃昨日通つたナザレのドイツ・ホテルで休憩。再びタボル山を左方に眺めて、車を驅れば、キリストが多くの癩病患者を治したと云ふアンゲネム(新約 Angels?)の古跡を通る。

この附近に於ける Megiddo (el-Jejum) と呼ぶ古代都市を、目下ドイツ人が發掘中だと、ドラゴマンが云ふ。一時 Nablus の田舎ホテルで午餐。ナブルスは聖書に見ゆる Shechem のことだ。これ亦世界最古の都市の一つである。アブラハムやヤコブが此地を通つて所謂『約束の地』に向つたことは創世紀の中に見へて居る。今はサマリア州の首府で、人口約一萬六千を數ふる。英國人の經營する教會や病院がある。又橄欖油から石鹼を造る製造所が數戸ある。他にビザンツ帝國や十字軍の教會に充てられたモスクが幾らかある。

吾等はナブルス市の南西端なる所謂サマリアン街に行つて、其處の會堂シナゴグに納められてゐる三千五百年前サマリア語で書かれたと傳へらるる『モーゼの五書』(Pentateuch)のパーチメントを拜觀した。寶玉を鏤めた函内に、ヴェネティア製の青色の織物で鄭重に包まれてゐる。この文書の原本は、猶太人がバビロンに捕へられた前まで使つてゐたフェニキヤ文字で書かれてゐたのだと云ふことだ。現今保存せられてゐるのは、後世に至つて眞の文

書から寫し取つたものに外ならない。次に吾等は  
バザールに行つた。相も變らず、薄暗く且狭苦しい  
窟の街路を通ると、變な臭氣が鼻を突く。驢馬が  
重荷を負はされて可愛想だ。ナブルスを自動車で  
出發して、二時過ヤコブの井を視た。ギリシヤ教  
の番僧が、蠟燭三本を桶の内に點じて吾等を案内  
する。井の深さ七十尺、底に達すところに水が少  
し出る。彼は井から水を釣り上げて、吾等一行  
を犒つた。時にとつての甘露だ。自動車は碯確な  
サマリア山脈の豁間を縫ふて通るのだから、ゴト

くと厭な音がして、乗心地が極めて悪い。沿道  
到る處、橄欖、松、仙人掌がはびこつてゐる。路  
々駱駝と驢馬とに重荷を背負はせたアラビヤ人の  
隊商に出逢つた。四時頃目的地のジェルサレムが眼  
界に這入つたとき、吾等は恰も昔時の猶太人がカ  
ナンの地に到達したときの快感もかうであつたら  
うと、思はず、快哉を叫んだ。四時半吾等の自動  
車はジェルサレム市のジャッファ門側なるグラント・  
ホテルに留つた。

占部百太郎